

Harvard Conference 2017 報告書



2017.02.28

HCAP東京大学運営委員会11期

HCAP
T O K Y O



目次

ハーバードカンファレンス2017 概要	2
学術企画について	3
文化企画について	5
交流企画について	7
おわりに	9





ハーバードカンファレンス2017 概要

ハーバードカンファレンスとは

ハーバードカンファレンスとは、ハーバード大学にあるHarvard College in Asia Program (以下HCAP) の本部が企画運営を行う一週間にわたる国際交流プログラムのことである。学術企画・文化企画・交流企画の3種類で構成されるカンファレンスを通して、アジア9か国の学生がハーバード大学の生徒と相互理解を深める。

ハーバードカンファレンス2017 概要

主催： HCAP ハーバード本部

開催地： ハーバード大学

日程： 2017年1月15日（日）から 2016年1月22日（日）

テーマ： Mind, Body, and Society: Global Health Challenges of the 21st Century

参加者：

- ・ハーバード大学 学部生 95名
- 以下、学部生各8名程度
- ・ Chulalongkorn Univerity (タイ)
- ・ American University in Dubai (アラブ首長国連邦)
- ・ University of Hong Kong (香港)
- ・ Boğaziçi University (トルコ)
- ・ St.Xavier's College (インド)
- ・ Ewha Womans University (韓国)
- ・ Singapore Management University (シンガポール)
- ・ National Taiwan University (台湾)
- ・ University of Tokyo 【東京大学】 (日本)

以上 計166名





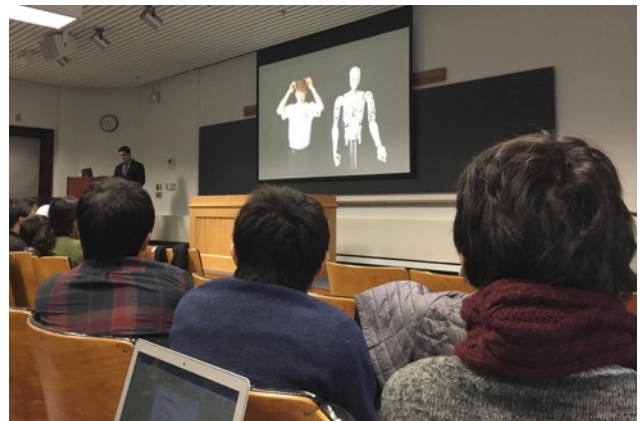
学術企画

学術企画統括

学術企画では、ハーバードカンファレンス2017のテーマである“Mind, Body, and Society: Global Health Challenges of the 21st Century”（心と体、そして社会—21世紀のグローバル・ヘルスに向き合う）に関連する内容について見識を深めた。具体的には、様々な分野の教授によるレクチャーおよびパネルディスカッション、各国の健康に関する問題について意見を交換するケーススタディ、各国の代表が自国の文化や社会について語るTED Talkなどが行われた。英語で講義の内容を理解したり、意見を述べたりすることに苦戦したメンバーも多かったが、多くの学びを得ることができた。

レクチャー・パネルディスカッション

HCAP本部が招待した教授による60分程度の有識者講演が、大教室でほぼ毎日行われた。レクチャーでは、感染症診断、放射線治療、死生観、生活習慣、児童医療、瞑想など、幅広いテーマが取り上げられていた。パネルディスカッションでは、脳波から集中力を測定する機器の開発者の方や、遺伝子データに基づくオーダーメイド化粧品の開発者の方などが招かれていた。どの講義でも、講義中や講義終了後の質疑応答の時間に、学生たちが積極的に挙手して質問をしており、一方向的であることの多い日本の講義との違いに驚かされるとともに、自分達の授業の受け方について考え直させられた。また、放射線治療に関する講義で、本団体メンバーの1人が、東京大学の実験の授業で学んだ内容を基に質問したり、死生観の授業で日本での安楽死や脳死の扱われ方について取り上げられた際、自分の事前知識とスライドの内容の違いの理由を考察することによって学びが得られたりと、「教養」の重要性についても痛感させられた。





ケーススタディ

ハーバード生と各アジアの学生1人ずつのグループに分かれて、各国が事前に準備して提示した健康問題に対して、大学レベルの身近な範囲で行える有効な対策を考えた。東京大学は福島における健康問題を取りあげ、現在の福島が直面する厳しい現状を伝えたいと、生活環境の変化によって生じた生活習慣病の増加や介護者不足をいかに食い止めるかについて考えてもらった。発言内容に関しては、鋭い意見から本筋とずれているのではないかとと思われるような意見まで様々であったが、20名程度のチームで各々が担当するパートを素早く決定して、1時間もかからず20ページ弱のスライドを作り上げてしまう手腕には恐れいった。

最終日には各グループがプレゼンテーションを行い、議論の成果を共有しあった（日程の都合上、東京大学のメンバーは残念ながら参加することができなかった）。



テッドトーク

TEDの形式を模して各国の代表がプレゼンテーションを行った。私たち東京大学は、近年世界に広がりつつある「Kawaii」文化を扱った。

他国のプレゼンテーションも、各国の特色に沿った印象的なものが多く、とりわけシリア内戦を主題としたドバイ代表のプレゼンテーション、インドにおける女性差別を扱ったインド代表のプレゼンテーションは、示唆に富んだものであった。前者では、空爆によって失われた美しいシリアの都市の街並みの写真、美しくも悲壮な旋律に載せた人々の歌声が使用され、日本では実感しづらいシリア内戦の実情を痛切に考えさせられた。後者では、スピーカーの実体験を踏まえ、インドでの女性差別の実情が語られた。インドの過酷な現状を知るとともに、日本での女性差別を想起せずにはいられなかった。

ハーバードカンファレンスも終盤に差し掛かって、各国のプレゼンターの人となりや一定程度把握していたこともあり、各国の発表内容が身近に感じられた意義深い企画であった。





文化企画

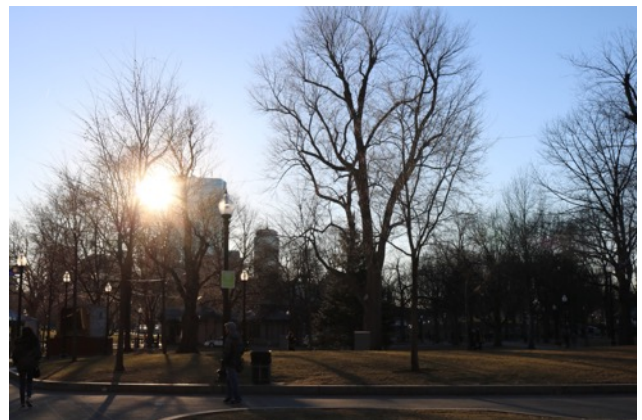
文化企画統括

文化企画においては、異なるバックグラウンドを持つハーバード生とアジアの学生達が互いの持つ文化を伝え合った。具体的には、ハーバードやボストン周辺の街・観光スポットのツアーや、各国が自国の食文化を活かした料理をつくるアイアンシェフなどの企画が行われ、互いの文化についてより詳細に尋ね合うきっかけとなった。

ハーバード・ボストンツアー

3月に東京を訪れる予定のハーバード生達に案内してもらい、ハーバード大学のキャンパスとボストンの街を歩いた。キャンパス内の各建物を訪れながらその場所にまつわるエピソードを聞き、ハーバード大学が誇る400年の歴史を感じることができた。また、ハリポッター映画のモデルともなったハーバード大学の食堂にも特別に入ることができ、その荘厳な雰囲気さに圧倒された。

ボストンツアーでは、金色の屋根を持つマサチューセッツ議事堂の周辺を歩いた。彼等はキャンパス外に出かける機会がほとんど無いために、意外にもボストンの街を詳しくは知らないとのことだった。そのため、インターネットで調べながらの手探りのツアーとなったが、興味分野について話し合ったり日本語を教えたりと、会話が弾んだ。





アイアンシェフ

各国の参加者が、20ドルの予算で、自国の食文化を活かした創作料理を作った。私たち東京大学は、「天ぷらのリンゴチリソース添え」と「生姜焼き」の二品を作った。食材の買い出しで訪れた米国のスーパーマーケットでは、他のアジアの国々の調味料が豊富にそろっていた一方、日本の「出汁」がおかれておらず、食材の味付けには苦心した。日本らしい薄口の味付けが合わない可能性を考慮し、日本の食を楽しんでもらえるように濃い味付けをするなど、工夫を凝らした。



ビール工場見学

Samuel Adamsのビール工場を訪問し、ビール製法の説明を受けつつ麦芽の味やホップの香りを楽しんだ。説明の端々にジョークが混ぜられており、ビールに関心が薄いメンバーも満足できるツアーであった。最後のビール試飲会では、21歳未満の東京メンバーは誰も飲むことができず、ソフトドリンクのRoot Beerで乾杯した。



ボストン美術館見学

ハーバード生同行の下、ボストン市内の博物館を訪れた。ゴッガンやピカソなどの名だたる芸術家の作品から、古代ローマのアウグストゥスの胸像や、日本の琴や中国の宋代の陶磁器など、古今東西の様々な文物に触れることができた。異国の地でありながらも、今一度芸術の持つ真価を体感させられた。





交流企画

交流企画統括

交流企画においては、チームに分かれてお菓子の家を作るジンジャーブレッドハウス、各国が出し物を行うタレントショー、最も素敵な男性を選出するMr. HCAPなどの企画が行われた。これらの企画は端的に言ってしまうとお遊びであるが、心理的距離を縮めて個人をより深く知るには、こうした場が欠かせないことが身をもって感じられた。また、いかに会場を盛り上げられるかなど、勉学に限らない広い範囲における各大学の参加者の能力の高さに驚かされた。



ジンジャーブレッドハウス

各国がハーバード生とチームになって、ジンジャーブレッド（クッキー）とマシュマロなどを用いたお菓子の家を作るゲームが行われた。短い制限時間の中で、各国が自国の建造物をかわいい装飾とともに作り上げていた。東京チームは雪化粧をした五重塔を表現し、「もっともクリスマスらしいで賞」を勝ち取った。また完成後は、あるハーバード生の要望に応じて本団体メンバーの一人がジンジャーブレッドハウスの早食いに挑戦して、大きな盛り上がりを見せた。





タレントショー

各国が事前に準備してきた出し物を行った。伝統的な踊りや歌、劇、さらには会場全体を巻き込んでのゲームなど、出し物の中身だけでなく方法をもが、豊かな国際色を感じさせる発表会となった。私たち東京大学は、ドラマ『逃げるは恥だが役に立つ』のエンディングで踊られた恋ダンスと、RADIO FISHの『PERFECT HUMAN』を披露し、無事に拍手喝采を受けることができた。

後半の「Chubby Bunny（口にどれだけマシュマロを詰められるかを競うゲーム）」では、他国のメンバーがこっそり不正を行うなか、東京大学のメンバーがルールを厳守しつつも見事に優勝を果たした。



Mr. HCAP

各国の代表者が、それぞれの持ち味を武器にして審査員である女の子たちにアピールし、最も魅力ある男性を決定するコンテストが行われた。最終的には、あまり自己アピールに慣れていなさそうな3名がファイナリストとして残った。そのうちの1人、東京大学のメンバーは、日本から持参したピコ太郎のPPAPの衣装を身に着けて出場し、見事優勝を果たした（東京大学メンバーが優勝するのは3年ぶり）。審査員が出場者のパフォーマンスを手伝うことが許容されるなど、ルールの寛容さなどの面でも日本との大きな文化の違いを感じたコンテストだった。





終わりに

「日本」を背負う。

ハーバードでは、このことをとても実感する一週間を過ごしました。ハーバード生と、各国のトップ大学に在籍するアジア9カ国の代表団が集うこのカンファレンスでは、多くの時間を出身の国や大学と関係なく、いろんな大学生と共に笑い、学び、議論して過ごしました。共に時間を過ごして行くうちに、彼らと多くの共通するものを見つけました。

しかし、カンファレンスを経て、国境を越えた相通ずるものを発見すると同時に、他のカンファレンス参加者は私たちを通して「日本」を見ているのだと気づきました。

カンファレンス中、身近な生活習慣やお笑い番組のことから、安倍政権や古代歴史のことまで、「日本」について急に他の国の参加者から聞かれる場面が何度かありました。

そのような時に、このカンファレンスにおいて「日本代表」とされている私たちがどう答え、何を伝えるか。それによって、私たちに質問してきた彼らの中での「日本」像は大きく変わる。アジア各国のトップ大学の学生がハーバードで集結して開かれているカンファレンスだからこそ、今後日本とアジア、アメリカがどのような関係を構築するか、その中で自分はどのような役割を担うのかについて考えを巡らせることができました。

私たちはハーバードで、今後世界を共に担ってゆくであろう学生たちと濃密な一週間を過ごし、日本と自分の世界の中での位置を、自分たちなりに考えることができました。このような貴重な経験ができたのは、これまで様々な形でHCAP東京大学運営委員会をご支援いただいている全ての団体・個人様のおかげです。この場を借りて、深く感謝申し上げます。

ハーバードカンファレンスが終わった今、残るは一年間かけて準備を重ねてきた東京カンファレンスです。私たちの集大成としての東京カンファレンスを成功に導けるよう、ハーバードでの経験を取り入れながら邁進して参ります。

今後とも、ご支援とご協力を何卒よろしく申し上げます。



HCAP東京大学運営委員会11期
代表 高佐綾菜